

近畿地方における前方後円墳の分布論的検討  
—GIS データベース利用の試み—

Examinations on the distribution of  
Keyhole-shaped burial mounds in Kinki region

出田 和久

Kazuhisa Ideta

奈良女子大学文学部, 奈良市北魚屋西町

Nara Women's University, Kitauoya-Nishi-Machi, Nara

あらまし：本研究の目的は、従来十分に分布を提示することなく論じられる傾向にあった前方後円墳の分布に関して、詳細な分布図を作成し、その特徴を把握することにより、前方後円墳の性格をめぐる理解に新たな知見を加えることができるかについて予察的に検討することにある。前方後円墳に関して、墳丘、内部主体、外表施設、副葬品などに関する GIS データベースを作成し、前方後円墳の主要な属性ごとにあるいはその組合せの分布図を作成し、分布上の特徴を抽出し、若干の検討を加えた。その結果、10 期編年と諸属性等をクロスさせて分布を観察することにより、大和川が河内平野に出てきた位置とそれに連続する地域に所在する玉手山古墳群と古市古墳群における大型前方後円墳の築造が、奈良盆地を含めた他地域には見られないほど長期間にわたり継続することが指摘できるなど、成果が期待できることが明らかとなった。

Summary: The purpose of this study is to discuss the distribution pattern of old keyhole-shaped burial mounds (*Zenpoukouenfun*) in Japan in Kofun-period (BP.1850-1500). The Kofun-period can be divided into 10 phases. At first the author built the database on attributes (for example, size of a mound, relics such as bronze mirror, armor, iron sword and so on) of the keyhole-shaped burial mounds in Kinki region. Then the following various distribution maps were made with the aid of GIS, 1) on each attribute of burial mounds, 2) on each phase of the Kofun-period, 3) on size of a mound. The results show that the large-size mounds are distributed in the area of a gateway to the Nara Basin where is the heartland of ancient Japan from Kawachi area and that discussing through the distribution maps on each attribute of burial mounds in relating to size of a mound in each phase will be expected to be very fruitful way to gain the new knowledge on the nature of keyhole-shaped burial mounds.

はじめに

奈良女子大学の 21 世紀 COE プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」では、「奈良盆地歴史地理データベース」の構築をすすめている。これはこれまで作成されてきた歴史情報のデータベースのほとんどが、単に文字ベースのテキストデータから構成されており、東京大学史料編纂所の「史料編纂所所蔵肖像画模本データベース」や「古写真データベース」、

「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」や「東洋文庫所蔵」画像史料マルチメディアデータベースなどは例外的に画像を伴っているものといえよう。しかし、これらのデータベースにおいても必ずしもそれら画像やテキストに関連した地理情報が結合されているわけではない<sup>(1)</sup>。

奈良盆地は周知の通り盆地底全面にわたってと言っても過言ではないほどに広範に条里地割が残存し、

奈良盆地に所在した荘園の土帳などの土地関係史料が豊富に存在している。これらの史料は、条里プランによる位置情報が記載されているものが多く、条里地割の残存と相俟って早くから荘園史や歴史地理研究に利用されてきた<sup>(2)</sup>。条里地割は1町間隔の方格であり、これに条里呼称が付加されて条里プランが成立しているため、条里関係史料が示す地理情報は条里プランによりその場所は概ね特定できる。したがって、テキストデータである史料とその史料が示す土地情報をGISによって結合し、奈良盆地の歴史研究に活用しようというのが本プログラムにおける「奈良盆地歴史地理データベース」である。ただし、奈良盆地には条里地割だけではなく、平城京の条坊地割も残存し史料も多く存在するので、これに関しても同様にデータベースに加味することが可能である。さらに、条里地割や条坊地割が施工される以前の奈良盆地の開発状況を捉えることも視野に入れ、古墳時代や弥生時代の集落および前方後円墳に関しても本データベースに加えることを検討している。

本報告は、この「奈良盆地歴史地理データベース」の一部を構成する前方後円墳に関するGISデータベースを近畿地方全域に拡大して、近畿地方における前方後円墳に関して試みにいくつかの属性等を取り上げてその分布に関して若干の検討を行った結果について報告するものである。

## 1. 前方後円墳をめぐる理解

前方後円墳は古墳時代を特徴付ける墳墓の一形式で、古墳時代には巨大な墳丘を有する墓が盛行した。前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳はその基本形である。その規模はさまざまではあるが、最大規模のものをみると<sup>(3)</sup>、前方後円墳は大阪府堺市の大山古墳で、墳長が486mであるのに対して、前方後方墳は奈良県天理市の西山古墳で墳長180mである。ただし同古墳は墳丘が大きく2段に分かれ、下段が前方後方形で上段が前方後円形である。純然たる前方後方墳としては奈良県北葛城郡広陵町の新山古墳が墳長137mで最大である。因みに東国最大は栃木県藤本観音山古墳の116.5mである。円墳では埼玉県行田市の丸墓山古墳が102mで最大である。方墳は奈良県橿原市の榊山古墳が一辺85mで最大である。

このようにみると、前方後円墳の規模が特別に大きく、その規模における優位性が窺われる。また、築造数においても前方後円墳は約4800基と、400基ほどである

前方後方墳に比べて1ケタ多く築造され、さらに前方後円墳は前方後方墳に比して大規模なものが多く築造された。

弥生時代の首長層を埋葬した墳丘墓には大きく分けて円形と方形の形態があり、その築造に円形原理と方形原理<sup>(4)</sup>のいずれを採用するかにより、墳形に違いが表現され、それが首長の出自や政治的同盟関係を表しているとされる<sup>(5)</sup>。さらに、古墳時代には前方後円墳は前方後方墳に対して優位にあるとして、この墳丘の形態により首長の系譜や格式を表し、その規模により実力を示すという二重原理による身分表示システムが成立したとする。このように墳丘の型式と規模には一定の秩序が存在したとし、これを前方後円墳体制と称する<sup>(6)</sup>。

前方後円墳は、北は岩手県から南は鹿児島県まで分布する。墳長が100mを超えるような大規模な前方後円墳の分布は奈良盆地から河内平野とその周辺の地域に中心がある。しかし、大規模な前方後円墳は近畿中央部以外にも分布し、墳長が350mを超え第4位の規模を誇る造山古墳の所在する岡山県をはじめ宮城県や群馬県などの東北から関東地方、さらに宮崎県や鹿児島県などの南九州地方にまで、墳長が100mを超える大規模なものがみられる。また、近畿中央部における大規模な前方後円墳の分布は、時期によってその中心が変化することが指摘され<sup>(7)</sup>、単なる墓地の移動とするものから<sup>(8)</sup>、大和と河内の間での盟主権の移動があったとする考え<sup>(9)</sup>、大和もしくは河内と和泉の4有力首長が輪番で大王となり支配機構を分掌しながら各地の首長層を共同統治したとする考え<sup>(10)</sup>、さらには大王墓の位置は政権の所在地とは対応しないと考える<sup>(11)</sup>、など様々である。

このような前方後円墳の捉え方は、それが墳墓であるとはいえ墳丘が大きく、時に埴輪や葺石で表面が飾られ、見られることを前提として築造されており、首長霊継承の儀礼の場ともなった<sup>(12)</sup>政治的な所産であることを前提としている。前方後円墳は相当量の土木工事を伴い副葬された品々の経済的な側面を考慮すると、単に政治的所産であるとして政治モデルに基づいてその分布を解釈し、「大和王権」と地方との関係を捉えるだけでは必ずしも十分ではなく、経済的な視点も加味した解釈が必要ではないかと考えられる。この経済的な点に重点をおいて、古墳時代を通じた物資流通ネットワークの変容についてGISを用いて検討し、大規模な前方後円墳は、主要交通路と密接な関係のある

位置に立地し、物資流通ネットワークのなかで富を蓄積した有力者が築造したとの指摘もある<sup>(13)</sup>。

本研究ではこのような前方後円墳に関して、墳丘、内部主体、外表施設、副葬品などに関する GIS データベースを作成しているの、その主要な属性ごとやその組合せの分布図を作成し、分布上の特徴を抽出し、若干の検討を加え、上記の前方後円墳の性格をめぐる理解の一助となればと考えている。

## 2. 前方後円墳データベースの作成と GIS の利用

### 1) 前方後円墳のデータベース作成

前方後円墳に関しては、前方後円型という一定の型式を有し、数が多いことから数量的な分析が早くから多く行われてきた<sup>(14)</sup>。情報科学の分野において前方後円墳の形態のパターン分析を中心として、コンピュータを利用した研究が早くから行われていた<sup>(15)</sup>ことは、いかに前方後円墳が広く注目を浴びる存在であったかを如実に示している。報告者も以前九州地方の主要前方後円墳に関するデータベースを作成し、その地域性について簡単に検討したことがある<sup>(16)</sup>。その際、前方後円墳に関しては分析すべき要素が多岐にわたり、データ化すべき事項が非常に多く 140 基ほどについて整理したが、そのデータ収集作業には多くの労力を要した。その後間もなく全国の前方後円墳に関して墳形も含めて集成が行われ、一定の基準でデータがまとめられて『前方後円墳集成』が刊行された<sup>(17)</sup>。これは各地の古墳研究者が協力して全国的規模でまとめられたもので、前方後円墳データベースとでも称すべき成果であり、10 期編年による古墳の位置づけも妥当なものだと判断されている<sup>(18)</sup>。したがって、これを前方後円墳データベース作成のための基礎資料とし、必要に応じて報告書を参照することとした。

具体的な手順としては、入力作業が簡単なマイクロソフト社の EXCEL2000 を利用し、『前方後円墳集成』を資料としてデータベースを作成することとした。

まず、全前方後円墳に ID 番号を付す必要があるが、これは府県コードと府県別に付した 3 桁の古墳の通し番号によって与えることとした。たとえば、奈良県に所在する箸墓古墳の場合、『前方後円墳集成』の奈良県の部分で 133 番目に記載されているので、この前に府県コードの 29 を付して 29133 が箸墓古墳の ID 番号となる。ArcGIS では、この ID 番号によって属性テーブル間の結合をすることになる。

入力したデータは、ID 番号、名称、所在地、緯度・経

度、地形(標高および比高を含む)のほか属性データとして墳丘に関しては形状、規模(墳長、後円部径、前方部長さ・幅など)、方位、周濠の有無等、外表施設(埴輪の有無とその型式、葺石の有無など)、内部主体(種類、長さ・幅など)、副葬品(鏡、装身具、石製模造品、武器、武具、農工具、土器など)などの諸データである。これに『前方後円墳集成』の近畿編の旧国別にまとめられた地域の概要の編年表に掲載されている前方後円墳についてはその時期を 10 期編年にしたがって入力した。これらの EXCEL で作成したデータベースを加工して、ArcGIS を使用して各種の属性に関して分布図を作成することになる。データの加工に際しては、一部にあるあいまいな表現や不分明な点に関して一部便宜的な取り扱いを決めて修正を行った。たとえば、前記の前方後円墳の編年表で 1 期と 2 期の境界に位置づけられている場合や、1 期と 2 期の境界線が入っていないで 2 つのセルを統合して記載がある場合は、基本的にはデータは検討の基礎とするものであるため 1 期と 2 期の両方の時期ともに入力することとした。その結果、全体で 876 の前方後円墳があり、そのうち 476 古墳(前期のように複数の時期を入力した古墳もあるので延べ数では 529 基となる)がある程度時期が判明していることが分かった。時期別に整理すると表-1 のようになり、時期が明確なものでは 9 期が最も多く 67 基で、不確かな時期を含めると 3 期が 104 基と最も多くなる。

表-1 時期別の前方後円墳の数

時 期	古墳の数	時 期	古墳の数
1 期	31	5-6 期	4
1-2 期	7	5-7 期	4
2 期	33	6 期	15
2-3 期	7	6-7 期	13
2-4 期	2	7 期	33
3 期	55	7-8 期	3
3-4 期	25	8 期	38
3-5 期	15	8-9 期	16
4 期	49	9 期	67
4-5 期	17	9-10 期	16
5 期	49	10 期	30
		合 計	529

なお、『前方後円墳集成』には緯度・経度の情報が記されていないので、フリーソフトのカシミール 3D を使用して『前方後円墳集成』掲載の分布図に示された位

置から、前方部と後円部のくびれ部の中央を当該前方後円墳の位置として緯度経度を取得して、その情報を付け加えることとした。これにより ArcGIS で各種分布図が作成できることになる。

## 2) GIS の利用による分布図の作成

このようにして作成したデータベースをもとに ArcGIS を使用して、前方後円墳の主要な属性や副葬品について分布図を作成した。なお、結果の解釈に当たっては、対象地域を近畿地方と限定しているため、より広域にわたる検討が必要な事象も存在する可能性点には注意が必要であろう。また、上記のように半分強の前方後円墳の時期が一応推定されているので、時期と属性を組み合わせた分布図の作成が可能である。時期があいまいで複数の時期にまたがって推定されている場合は便宜的に古い時期を採用して図示することにした。

以下、試みに作成した分布図から明らかとなる点について若干検討をすることとしたい。

## 3. 前方後円墳の時期別および分布図による検討

### 1) 副葬品の時期別の出土傾向

前述のように『前方後円墳集成』の地域の概要の部分に編年表があり、時期がある程度判明乃至推定されている前方後円墳(必ずしも時期は確定していないものも含むが煩雑になるのを避けるために以下では時期判明分と記す)に限定して、副葬品の出土の有無について時期別にみると、種類により出土する時期に特色があることが分かる。

まず、中国鏡についてみると、出土古墳は 20 前後と少ないが、三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡はともに 2 期から 4 期に多く出土し、特に前者では約 8 割を占めている。

腕飾類についてみると、石製腕飾類は碧玉製腕飾とともに 3 期を中心に 2 期から 4 期の古墳に出土し、5 期の島ノ山古墳が石釧を出土しているのは例外的といえ、石製腕飾類は前期古墳に多く副葬されるといえる。

武器についてみると、短甲は 5 期は 1 基のみであるが、3 期から 7 期にかけて 30 基と、時期不明を除くと大半を占め、中期古墳に多く副葬される。馬具は、3 期と 5 期に各 1 基、6 期に 2 基みられるが、8 期に 9 基、9 期に 26 基、10 期に 3 基と後期古墳に副葬されることが多く、時期不明が 20 期あるものの前期および中期

の前方後円墳では少ない。

武器についてみると、鉄剣は 1 期から 10 期全時期の古墳で出土しているが、3 期がもつとも多く、3 期から 5 期で約 6 割を占める。鉄刀(156 基、うち時期判明分 116 基)は、全期にわたって副葬されているが、やはり 3 期から 5 期に多く両時期で時期が推定されている分の約 45%を占める。

農具についてみると、出土しているのは農具(55 基)は鎌(42 基)と鍬(18 基)が多く、ほぼ全ての時期に出土がみられるが、時期判明分のうち 13 基ある 3 期に中心がある。工具では、刀子が 3 分の 2(92 基)で出土し、続いて斧が 76 基と多く、その他鉋(18 基)となるが、時期別には農具ほどには集中をみないが、約 2 割が 3 期であり、やはり 3 期に多い傾向はうかがえる。

このようにみえてみると、3 期には特に副葬品の種類が豊富であることが分かり、興味深い。

### 2) 副葬品からみた分布

大型の前方後円墳の分布に関しては全国的な視野から指摘がなされている<sup>(19)</sup>が、墳長を唯一の指標にしたもので、副葬品などの出土品は考慮に入られていない。そこで、対象地域が近畿地方と限定されているので解釈に際してはその点の留保は必要であるが、以下において副葬品の出土分布に関して、近畿地方のみを対象とした場合にどのようなことが指摘できるかを検討することとしたい。

三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡の両方を出土する前方後円墳は 8 基あり、少なくともいずれかを出土する前方後円墳の 3 分の 1 強を占める。画文帯神獣鏡は奈良盆地(大和川流域)と淀川流域および大阪湾沿岸(以下、近畿中央部と略称する)の前方後円墳からの出土のみで、三角縁神獣鏡が播磨西部揖保川流域に 3 か所、園部盆地、湖東平野にもみられるのに対して、範囲がより限られている。

碧玉製腕飾を含めて石製腕飾類の分布をみると、大半が近畿中央部に集中している。碧玉製腕飾はより限定的分布を示し、加古川上流域や湖東平野で出土古墳が減少する。

武器についてみると、短甲は近畿中央部と湖東平野、加古川上流域、紀ノ川流域にはほぼ限定されている。奈良盆地では 6 期までしかみられないが、他地域では 4 期と 7 期が多い。馬具は、短甲よりも広範囲に分布し、播磨南部や由良川や加古川流域、湖北の天野川流域、紀伊の日高川下流などにもみられる。時期との関連でみると、加古川下流部の行者塚古墳(110m)が唯

一 3期と最古で、あとは奈良盆地の5期の島ノ山古墳(墳長195m、以下、同様で墳長を省略する)、6期の奈良市のベンショ塚古墳(70m)と各1基あり、7期になって5基と増加する。9期に23基と集中し、分布範囲が外縁部に一気に拡大する。

武器についてみると、鉄剣は近畿中央部以外にも分布が広がっている。1期と2期についてみると、その分布は播磨南部地域と近畿中央部に限られ、3期になると播磨北部、丹後、近江の諸地域に拡大する。ただ、近江では7期までしかみられない。鉄刀も広範な分布を示し、鉄剣同様に1期と2期は播磨南部にはみられないものの近江や但馬、丹後では3期にならないとみられない。1期にみられる5基のうち2基が播磨に分布し、播磨では4期～8期の間に鉄刀を副葬する前方後円墳がみられない。

農具についてみると、工具では1期の5基のうち3基が播磨南部に分布し、いずれも墳長が50m未満の小規模な前方後円墳である。2期までは分布は近畿中央部と播磨南部に限られているが、3期になると近江、播磨北部にも出現する。農具は、1期は椿井大塚山古墳(京都府木津川市)と権現山51号墳(兵庫県揖保郡たつの市)の2基のみで、3期に近江に拡大するが、少なくとも5期にはみられなくなり、近江では出土する時期がかなり限定的である。

以上、主要な副葬品について分布をみてきた。上で検討したなかでは、特に次のような点が興味深い。

石製腕飾類の分布(特に碧玉製)が近畿中央部の前方後円墳からの出土にほぼ限定されている。

播磨南部には早い時期から多様な副葬品がみられ、一方、椿井大塚山古墳は出土する副葬品の種類が豊富である。

### 3) 前方後円墳の規模と築造時期に関する分布論的検討(図-1)

前方後円墳の規模についてみると、100mを超える前方後円墳は時期判明分で120基あり、その割合は25%で、時期不明も含めた全体でみると160基で、割合は18.2%である。150m超となると、時期判明分で44基、9%である。なお、50m未満のものは時期判明分で187基あり、39%を占め、時期不明を含めると451基、51%と過半数を占める。1期では100m超の前方後円墳は6基あり、うち5基が大和・山城地域に集中し、1基が播磨西部の丁瓢塚古墳(104m、姫路市)である。2期には200mを超えるような前方後円墳は桜井茶臼

山古墳(奈良県桜井市、207m)の1基のみであるが、3期になると古墳数が2.5倍になるとともに、大型化し200mを超えるものが6基出現する。しかし、その分布は奈良盆地北部の佐紀盾列古墳群の五社神古墳(伝神功皇后陵古墳、275m)、佐紀陵山古墳(伝日葉酸媛命陵古墳、207m)と宝来山古墳(伝垂仁天皇陵古墳、227m)の3基、東南部の柳本・大和古墳群の行燈山古墳(伝崇神天皇陵古墳、242m)、渋谷向山古墳(伝景行天皇陵古墳、300m)とメスリ山古墳(桜井市、推定250m)の3基と全て奈良盆地に所在するのが特色である。4期には奈良盆地北部の佐紀盾列古墳群の佐紀石塚山古墳(伝成務天皇陵古墳、218m)と南西部の馬見古墳群の巢山古墳(広陵町、204m)および河内平野の古市古墳群の津堂城山古墳(大阪府藤井寺市、208m)の3基で、後者は古市古墳群中の最古の古墳と見られている。

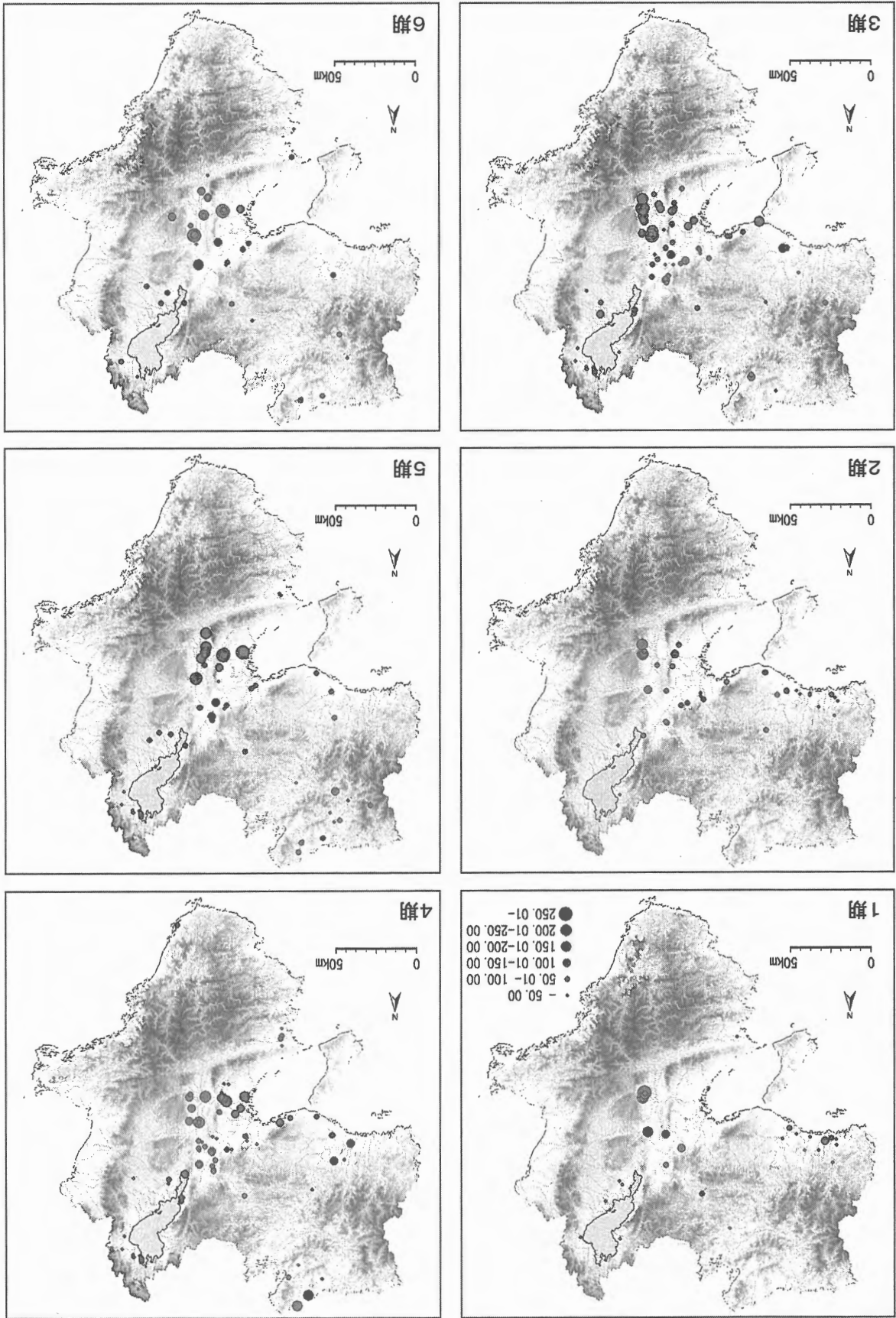
古墳時代中期の5期になると9基に増加し、そのうち佐紀盾列古墳群に3基、馬見古墳群に2基、奈良盆地南部に1基と奈良盆地に6基、古市古墳群に2基、百舌鳥古墳群に1基となる。6期になると佐紀盾列古墳群に1基(ウワナベ古墳、270m)と古市古墳群に1基(誉田御廟山古墳(伝応神天皇陵古墳)、425m)の2基に減少する。続いて7期には百舌鳥古墳群に2基、古市古墳群に1基、淀川流域の太田茶臼山古墳(伝継体天皇陵古墳、大阪府茨木市、226m)の4基となり、8期には古市古墳群の岡ミサンザイ古墳(伝仲哀天皇陵古墳、242m)1基のみとなり、巨大前方後円墳の時代は終わる。

このようにみると、4期の津堂城山古墳にはじまり各期とも継続して8期まで200mを超える大前方後円墳が築造され続け、9期においても200mには達しないが122mで3位の墳長を示す野中ボケ山古墳(伝仁賢天皇陵古墳)が所在している古市古墳群の大前方後円墳築造に関する安定性が注目される。石川を挟んで直ぐ南東の玉手山丘陵を中心とした一帯には2期に墳長110mの玉手山1号墳が築造されるのをはじめ4期に墳長150mの後山古墳、さらに約2km東の大和川を望むところには3期に墳長130mの松岳山古墳が築造されるなど、古市古墳群とその周辺では2期以降100m超の前方後円墳が築造されている。このことはこの位置が大和川に沿うとともに河内から大和へ至る門戸に当たる要衝であることが重要な意味を持っていることを示唆するようである<sup>(20)</sup>。

また、1期には椿井大塚山古墳があった山城南部地



図-1 前方後円墳の時期別・規模別の分布



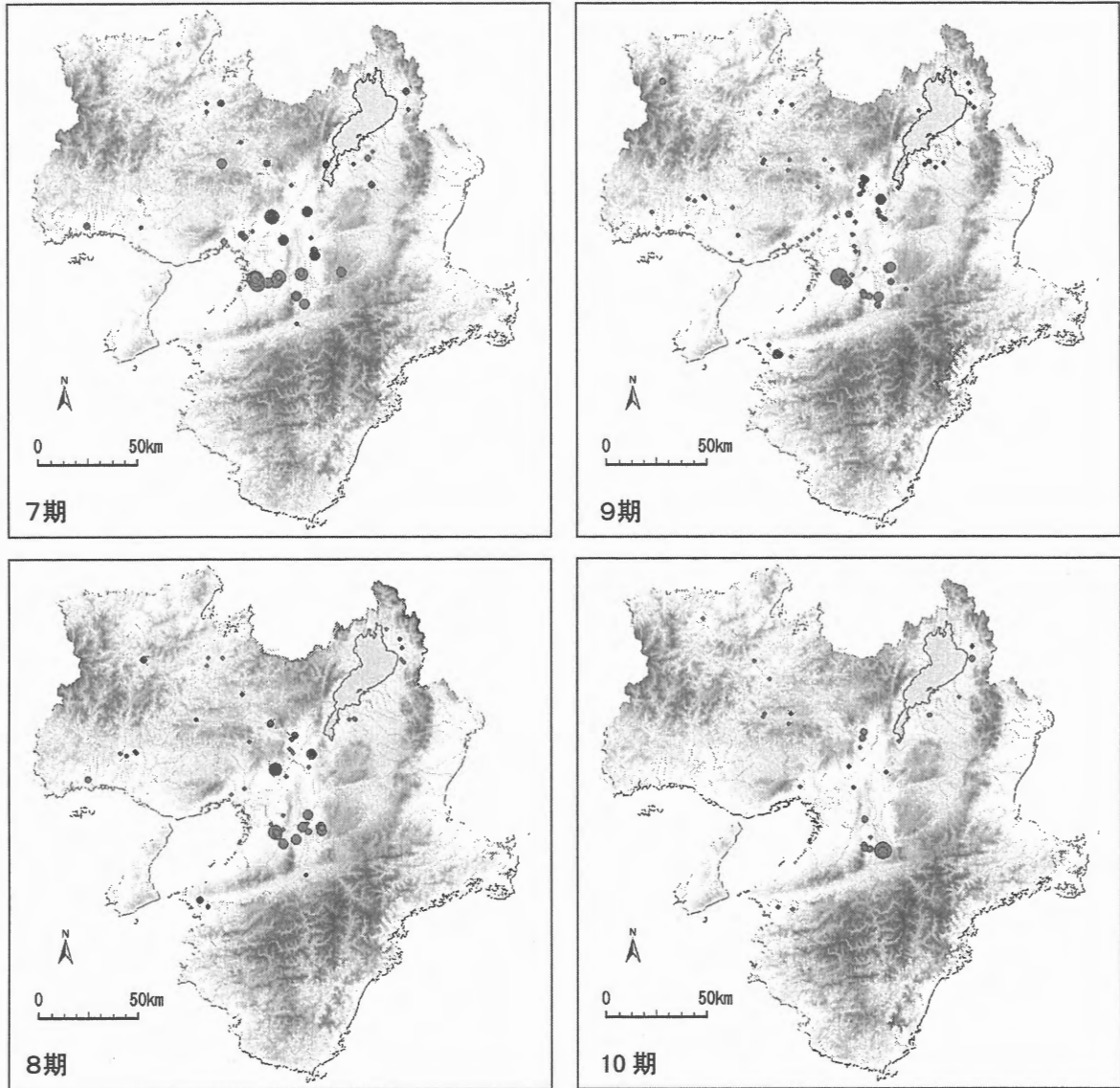


図-1 前方後円墳の時期別・規模別の分布

域は、2 期に平尾城山古墳(京都府木津川市山城町平尾城山、110m)が築造されるが、3 期には 100m超の前方後円墳は見られなくなり、南隣の奈良盆地北部の佐紀盾列古墳群に五社神古墳など 200m超の大前方後円墳が 6 期にかけて築造されるようになる。これをどのように解釈するかは、地理的に近接する両地域での各前方後円墳の副葬品などの詳細な比較検討が必要であろう。

3 期になると 100m超の古墳の分布が広がり、播磨東部(五色塚古墳、194m)、行者塚古墳、丹後(蛭子山1号墳、京都府与謝郡与謝野町加悦、145m)、近江(安土瓢箪山古墳、滋賀県蒲生郡安土町桑実寺、134m)に登場するが、4 期に丹後では神明山古墳(京丹後市丹後町、190m)、網野銚子山古墳(京丹後市網野町、

198m)、近江では膳所茶白山古墳(滋賀県大津市膳所、120m)、が築造され、5 期には黒部銚子山古墳(京丹後市弥栄町、100m)のみとなり、新たに但馬に池田古墳(兵庫県朝来市和田山町、136m)の出現を見るが、その後はこれらの地域では 100m超の古墳はみられない。ただし、7 期に丹波に雲部車塚古墳(雲部陵墓参考地、140m)が出現するが、付近では前後に前方後円墳はみられない。

4 期の前方後円墳の分布上の特色として、近畿中央部のなかでも奈良盆地への集中が弱まり、古市古墳群の前方後円墳の規模拡大と数の増加がうかがえる。6 期から 7 期にかけては奈良盆地における大前方後円墳築造の減少が顕著になり、代わって古市古墳群から百舌鳥古墳群へと大前方後円墳築造の中心が移動し

ている。8期以降は8期の岡ミサンザイ古墳(伝仲哀天皇陵古墳、242m、大阪府藤井寺市)と10期の見瀬丸山古墳(奈良県橿原市見瀬町、五条野町、310m)を除いて墳長が150mを超える大型前方後円墳はみられなくなる。

#### 4) 前方後円墳の規模と副葬品

次に、前方後円墳の規模と出土する副葬品とをクロスさせて分布図を作成し、規模と副葬品に関する分布傾向について若干検討することとした。

まず、中国鏡の三角縁神獸鏡を副葬する前方後円墳は、墳長100m以上が10基で最大は津堂城山古墳(大阪府藤井寺市)の208mである。三角縁神獸鏡は旧大和、山城、河内国域では墳長100m以上の前方後円墳に副葬される傾向が強いが、淀川流域を中心に墳長80m~120mの9基に副葬され、その時期は大

規模な1期の椿井大塚山古墳と6期の久津川車塚古墳を除くと2期~4期に限られる。また、播磨西部の吉島古墳(吉島松山古墳)、龍子三ツ塚1号墳、権現山51号墳の3基は墳長がそれぞれ30m、38m、48mと小規模であることが注目される。画文帯神獸鏡は半数近くが三角縁神獸鏡と伴見し、分布傾向はほぼ同様であるが、淀川流域からは少なくなっている。規模についてみると、画文帯神獸鏡を出土する前方後円墳で墳長100m以上は6基で、久津川車塚古墳が墳長180mで最大である(図-2)。

石製腕飾類についてみると、奈良盆地への集中度が高く、150mを超える大規模な前方後円墳に多い傾向がうかがえるが、その他の地域では100mを超える前方後円墳での出土は少ない。

武具の短甲についてみると、大山古墳(伝仁徳天皇

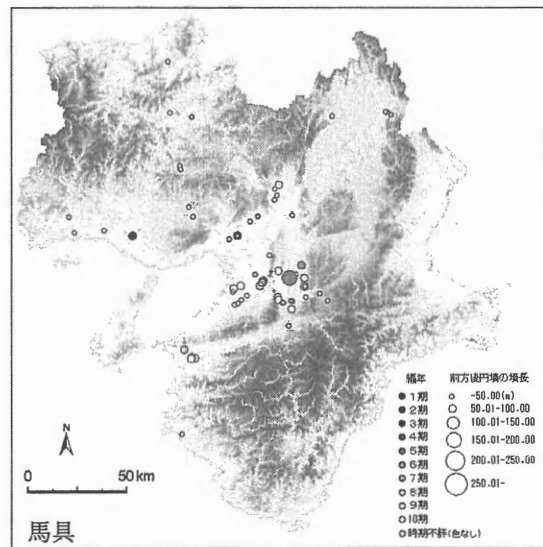
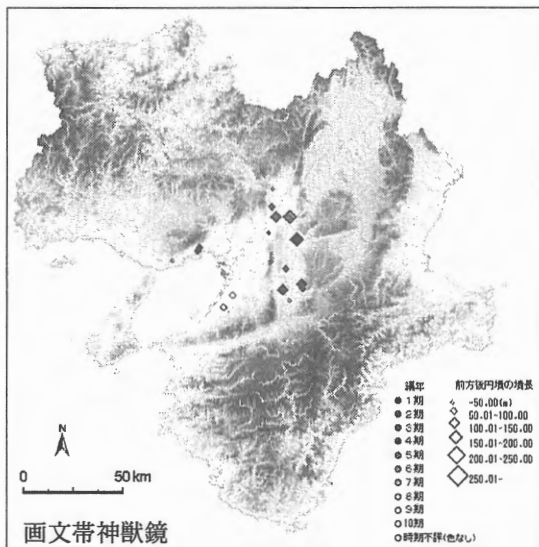
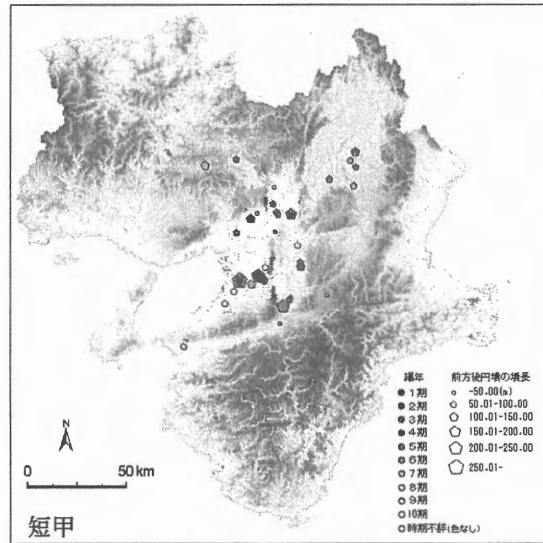
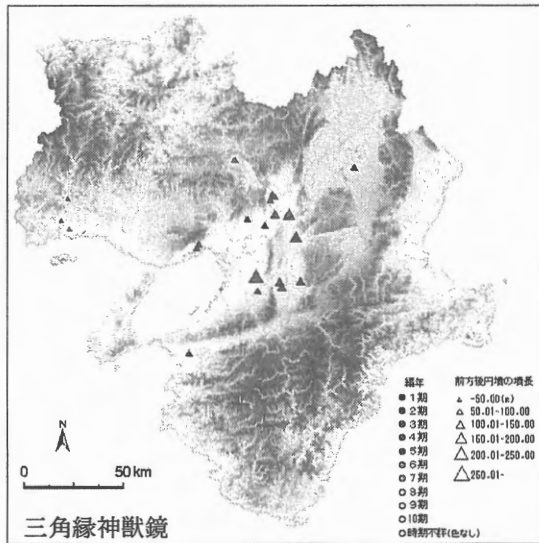


図-2 中国鏡の時期別・規模別分布

図-3 短甲と馬具の時期別・規模別分布



陵古墳)のような墳長 486mの巨大古墳から 20~30mの小規模なものまでみられ、規模との明らかな関連は見出し難い。馬具についてみると、200mを超える大前方後円墳には副葬が見られないことは興味深い。奈良盆地の島ノ山古墳(195m)が最大で、100m超ではほかに加古川下流の行者塚古墳(110m)があるのみで、総じて 50m以下の小前方後円墳に副葬される傾向が強うかがえる(図-3)。

武器についてみると、鉄剣、鉄刀ともに奈良盆地や河内平野では墳長 100m以上の比較的大きな前方後円墳への副葬が目立つが、近畿地方全体で見ると明らかな規模との関連はみられない。ただし、播磨西部では、墳長は 70m および 34.4m と比較的小規模な前方後円墳にみられる。

工具についてみると、2 期の桜井茶臼山古墳(奈良県桜井市、207m)、3 期のメスリ山古墳(奈良県桜井市、推定 250m)、5 期の室大墓古墳(奈良県御所市)を除くと、200mを超える大前方後円墳には副葬されていないという馬具と同様の特徴が指摘できる。

#### 4. まとめにかえて

これまで前方後円墳に関してさまざまな視点から検討がなされてきた。そのなかで分布論的検討も重要な位置を占めたが、分布図を提示して具体的な分布について論じたものはごく少数で、例外的でさえあったといっても過言ではない。研究者のイメージのなかに分布図は存在していたといってもよいであろう。しかし、それでは十分な議論の展開は期待できないことは多言を要さない。そこで、本報告は前方後円墳に関する GIS データベース構築の途中経過として作成した前方後円墳の副葬品等に関する分布図からどのような分布傾向がうかがえるかについて若干の検討を加えたものである。

対象とする地域を近畿地方に限定したため、分布の解釈にあたって留保が必要であることや、前方後円墳体制に関する検討に資するには不十分であり、より広域的な視点から検討すべきことなどは今後の課題とした上で、GIS を活用した分布図作成の成果について整理しておきたい。

・データベース作成に労力は要するものの、規模、埴輪などの外表施設、副葬品など様々な属性や要素に関する分布図の作成が容易に可能であり、考古学者によるより専門的な分布論的検討による成果が期待される。

・10 期編年と諸属性等をクロスさせて分布を観察することにより、分布現象の時空間的推移を詳細に検討することが可能である。

・具体的に明らかとなった点として、大和川が河内平野に出てきた位置とそれに連続する地域に所在する玉手山古墳群から古市古墳群における大型前方後円墳の築造が、奈良盆地を含めた他地域には見られないほど長期間にわたり継続することが指摘できた。

・データベース作成地域を拡大して、より広域的視野からの分布論的研究が必要である。

以上、今後前方後円墳 GIS データベースの活用により、一層詳細な検討を加えることによって、従来指摘されなかった事象を見出し、前方後円墳体制の検討にも資することを期待したい。

#### 注および参考文献

- (1) 東京大学史料編纂所では科学研究費基盤研究「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」において「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」を事例に地理情報を加味して GIS を活用した「東郷荘総合情報閲覧システム」を試作しているのは注目される。
- (2) たとえば、渡辺澄夫(1951): 畿内型庄園の名構造に関する一試論—大院領大和国若槻庄を中心として—、史学研究 46、pp.1~19(同(1956): 『畿内庄園の基礎構造 — 特に均等名庄園— 攝関家大番領番頭制庄園等に関する実証的研究—』所収、吉川弘文館)をはじめ、金田章裕(1971): 奈良・平安期の村落形態について、史林 54-3、pp.49~117(同(1985): 『条里と村落の歴史地理学研究』所収、大明堂)など枚挙に暇がないほどである。
- (3) 数値は『前方後円墳集成』近畿編(1992 年)および東北・関東編(1994 年)による。
- (4) 寺沢薫(1990): 弥生時代の円丘墓、古代学研究 123。
- (5) 都出比呂志(1991): 日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—、日本史研究 343、pp.5-39。
- (6) 都出: 前掲書
- (7) 白石太郎(1969): 畿内における大型古墳群の消長、考古学研究、16-1、pp.8-26。
- (8) 近藤義郎(1983): 『前方後円墳の時代』、岩波書店。
- (9) 白石太郎(1999): 『古墳とヤマト政権—古代国家はいかに形成されたか—』、文春新書

- (10) 広瀬和雄(2004): 畿内五大古墳群の特質(広瀬ほか編『古墳時代の政治構造: 前方後円墳からのアプローチ』所収)、青木書店、pp.17-35。
- (11) 吉村武彦(1998): 『古代天皇の誕生』、角川選書、角川書店。
- (12) 近藤義郎: 前掲書。広瀬はこれに対して異議を唱え、「亡き首長がカミになって共同体を守護する」との共同幻想が前方後円墳を生み出した」とし、「前方後円墳はく死した首長がカミとなって再生するための舞台装置であった」と主張している(広瀬(2003): 『前方後円墳国家』、角川選書、角川書店、pp.112、ほか)。しかし、政治を表現するものであるとしている(広瀬: 前掲書、p.113。)
- (13) 新納泉(2005): 経済モデルからみた前方後円墳の分布、考古学研究、52-1、pp.34-53。なお、前記したように本拠点の COE プログラムにおける「奈良盆地歴史地理データベース」は古代を中心としているが、その前史として古墳時代における奈良盆地の開発の状況を捉える一助にするために、前方後円墳の GIS データベース作成を構想しており、本報告はその成果の一部である。
- (14) 上田宏範(1969): 『前方後円墳』、学生社
- (15) 代表的な研究に、小沢一雅(1988): 『前方後円墳の数理』、雄山閣、がある。
- (16) 出田和久(1992): 『平成2・3年度科学研究費補助金(一般研究 C)研究成果報告書 古代九州における空間的組織化と空間システムの変化に関する地理学的研究』、大阪教育大学教育学部、38p。
- (17) 近藤義郎編(1991-2000): 『前方後円墳集成』1-6、山川出版社。
- (18) 新納: 前掲書。p.35。
- (19) 新納: 前掲書。pp.36~50。
- (20) 新納(前掲書)も玉手山1号墳などの位置が河内から大和への経路の起点として重要であることを指摘している。p.49。